

片岡欣夫

(株) 東芝

記憶に残る人々

後路さんから汗顔モノのご紹介をいただき、図らずも数年ぶりに会誌に記事を掲載いただく機会を得た。西城秀樹ばかりと評されたのは、いまも愛用しているグレーのスリーピーススーツにウルフカットという出で立ちで、当時事務局を担当されていた後路さんと綿谷さんにご挨拶をしたときのことだと記憶している。後路さん、片岡は今もあまり変わらない姿です。

さて、波乱万丈の人生をとのリクエストをいただいたのだが、ソフトウェア工学を学ぶ平凡な学生が電機メーカーのソフトウェア生産技術の研究所に就職し、たまさか機会をいただいて情報処理学会の会誌編集委員を経験させていただいた後に、一ソフトウェア工学研究者として会社人生の晩年に差し掛かるという、平凡な人生の予定であった。

その予定が狂ったのも、ソフトウェア工学が原因といえなくもない。2013年頃、本社の経営企画部に籍を置きながら、自身も設立に携わった社内のソフトウェア技術センターの再設計にかかわっていた。会誌編集委員としての経験も含め社内外でさまざまな経験を積ませていただき、企業におけるソフトウェア工学研究にそれなりの見識があるうと見込まれて任されたミッションであった。だがしかし、センター再設計の命を下した担当役員への報告の場で、事務局の立場でついつい小生意気な物言いをしたのを気に入られ、なぜか秘書室にスカウトされてしまったのだ。結果、5年半という長きにわたってソフトウェア工学の現場を離れることとなってしまった。雄弁は銀、沈黙は金とはよく言ったものである。

閑話休題、私が社内の前任者から会誌編集委員を引き継いだのは2002年4月であった。本部が現在の化学会館に移る前で、田町に通っていたのを思い出す。編集委員会には複数の専門委員会が存在していて、各社からさまざまな方々が参加されていた。秘書時代にも痛感したのだが、業界横断の機会というのは本当にありがたいもので、思い出に残る出会いがたくさんあった。その中でも特に印象に残っているお三方との出会いを紹介させていただく。

1人目は当時の編集長であった和田英一先生である。和田先生の経歴やひととなりについては私なぞが紹介するまでもないのであるが、ずっとHHKを愛用してきた若僧にとっては計算機科学の巨人とお仕事の機会があるというの

は感激モノであった。特に編集委員任期の後半は専門委員会の主査として本会議に出席させていただき、和田先生の飄々とした編集長ぶりが大変印象に残っている。日本技術者教育認定機構(JABEE)の活動でもご一緒させていただいたのも良い思い出である。当時の上司がJABEEのワシントン協定加盟に向けて活動していた縁で、安中市で開催された合宿に参加させていただいた。本会議では時間も限られておりなかなかお話ができないところ、会議後の懇親会モードの和田先生からさまざまなお話をお伺いできたのは貴重な経験となった。

そう、編集委員会は結構忙しいのである。各専門委員会での議論を受けて本会議が開催されるのだが、夕食のお弁当をとりながら会議が行われることになる。そこで登場するのが2人目、当時の事務局長であった湖東俊彦氏である。私には早食いの特技があり、秘書時代もこの特技が大変役に立った。食事付きの会議であっても一瞬で食事を平らげ、すぐさま次の動きができるように備える、食事をしながらの話題を記録する、などなどの利点もあるが、単純に早食いは昔からの私の持ち芸であった。その私が珍しく後れを取ったのが湖東さんである。最初は油断をしたのかとも思ったが、これが毎回良い勝負になるのである。あれから10年以上経つが、いまだに一般人で湖東さんに伍する方に出会ったことはない。そして秘書業務を経験した今なら分かる。あの能力は事務局長として相当役に立ったであろうと。

編集委員としての4年間で特集を3本担当させていただき、なんとか大過なく務めを果たせたと思っている。専門委員会とともに活動をさせていただいた方で一番印象に残っているのが日立製作所の小川秀人氏、3人目としてご紹介したい。小川さんは同世代、同分野、同業他社のエンジニアということで、情報処理学会の研究会のほか、某NPO法人のエンジニア育成プログラムや某業界団体の委員会活動など、今日に至るまでいろいろな場面で何度もご一緒させていただくこととなるのだが、編集委員会での出会いが最初だったと記憶している。一時期秘書稼業にかまけていた私のような者がいまだに学会活動等に顔を出せるのは、常にソフトウェア工学の第一線で活躍されてきた小川さんのような方の知己を得ていたことが大きいと感謝している。

ということで私からは感謝と頭出しだけをさせていただき、小川さん自らいろいろ語っていただきたいと思う。